

瀬波海岸のセナミスミレを訪ねて

石 沢 進

セナミスミレ（イソスミレ）の健在を確かめるため、1993年7月下旬に瀬波海岸を訪れた。海浜植物のハイネズ、ハマナス、ハマハタザオ、ハマヒルガオ、ハマボウフウ、ウンラン、オカヒジキ、ハマニガナ、ハマボス、ハマアカザ、ハマニンニク、コウボウシバ、ケカモノハシ、ハマゴウ、ナミキソウなどが生育し、それらに混じってセナミスミレも生えており、確かに目的のスミレに再会して安堵はしたものの、付近で進んでいる海岸の工事には気がかりである。砂丘海岸の地形は、比較的穏やかであるため、近年の大型機械で簡単に改変が可能であり、一度工事にかかると短期間に変貌させてしまうこともできる。今回訪れた瀬波海岸は瀬波温泉から岩船までの間であり、岩船側の海岸が新たに削られて工事が始まっていた。何んの目的かは明らかでないが、自然の植生の一部が

消滅していることは間違いない。

新潟県は、海岸線の長いのが地形上の特色になっているが、海岸の利用が急速に進み、道路の開設、宅地の造成などに加えて、4駆の自動車の普及で海岸砂丘に乗り入れ、海水浴客の踏みつけと、海辺植物に与える人為的影響の多様化が急速に高まり、消滅の一途をたどっている。海岸線が長いから何処かに自然の植生が残っているのではないかと、期待しているが、極めて少なくなっているのが、現状ようである。特に、新潟市内における海岸線のほとんどは、人の生活のために利用されて自然の状態を知ることが難しくなっている。帰化植物のオオマツヨイグサを海岸に人為的に繁茂させるのも昔の一時期の植生の景観であり、思い出も多いと思うが、在来の海浜植物でないのは物悲しい気分である。ハマヒルガオのような植物、中でもシロ

ヨモギの茂っている地域はそのままの状態を残す配慮を要望したい。ちなみにシロヨモギは、県内ではその生存が局所的で数ヶ所を数えるほどになっており、少なくとも現在の生育地はそのまま温存することが肝要である。

“新潟の自然を大切に”と、社会的には、自然環境を考える気運になってきてはいるが、海岸の自然の大切さとその実態は適確に把握されているとは言えない。とかく身近で手を加えない海岸は、雑草が生えた役に立たないところと判断しがちであるが、それぞれの地域に生き続ける大切な植物の住家であり、そこが壊されると生育していた植物は消滅する運命にある。身近な自然の理解が、新潟の自然を大切にすることに連なる。長い海岸線の所々に、一例としては瀬波海岸のように、人の手を加えない古来からの自然のままの聖域を望みたいものである。



海岸の破壊が進んでいる砂丘（岩船側）



ハイネズの群生する砂丘（瀬波側）



ハマナス



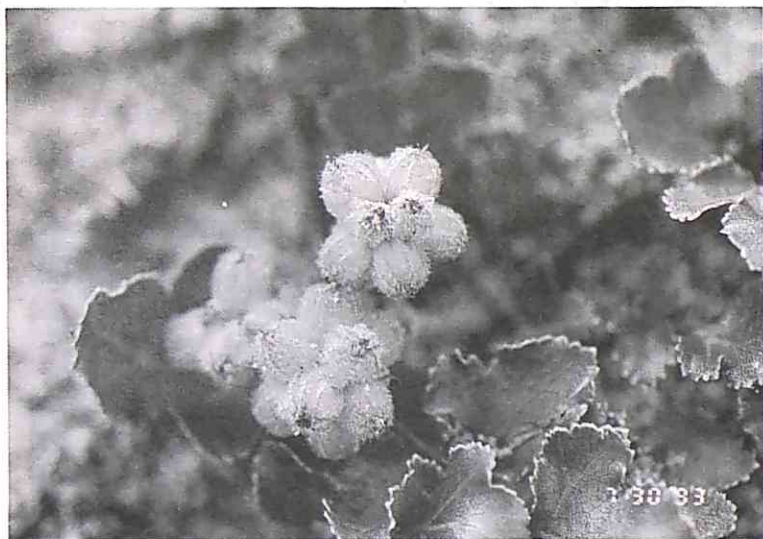
セナミスミレ



ハイネズ



ウンラン



ハマボウフウ



ケカモノハシ



ハマゴウ